大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

オンライン同時配信

総合地球環境学研究所 創立20周年

記念シンポジウム 第2部

人新世を生きる 私たちと 地球の未来可能性

2021年4月24日（土）

13:00-16:00

受付・開場
12:30

総合地球環境学研究所（地球研）は、2001年、「地球環境問題はことばの最も広い意味における人間の『文化』の問題である」と説いた日髙敏隆博士を初代所長に迎えて発足しました。

現代は、人類の活動が地球の隅々に影響を及ぼす新しい地質年代、「人新世（あるいは人類世）」であるともいわれており、地球環境問題を人間の文化の問題としてとらえる観点の重要さが増しています。私たちは今、COVID-19 によるコロナ禍や、急激に進む地球温暖化が一因とも考えられる自然災害に悩まされていますが、コロナ禍に代表される近年の数々の感染症は、過剰な開発が生態系を破壊し、その歪みからこぼれ落ちてきた汚染やウイルスが引き起こした健康被害である、つまり地球環境問題の一環であるとも考えられます。

今回のシンポジウムでは、こうした問題の解決の糸口ともなり、弾力性・回復力のある人間社会の形成を目指す地球研の研究例をご紹介しながら、広い視野と深い見識で自然と人、文化を見つめる有識者の方々も交えて、私たちはこれから自然と一緒にどう生きるべきかを考えます。

会場

京都府立 京都学・歴彩館
1F 大ホール
〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町1-29
YouTube、Zoomでのオンライン同時配信
※新型コロナウイルス感染症の拡大状況によってはオンラインのみになることがあります。

参加無料
要申込

詳しくはWEB特設サイトをご覧ください。
https://www.chikyu.ac.jp/rihn/20th/

講演1 生態学的健康観から考えるプラネタリーヘルス
門司 和彦　長崎大学多文化社会学部 学部長／熱帯医学・グローバルヘルス研究科 教授、グローバルヘルス専攻 専攻長

講演2 自然災害に強くしなやかな社会を築くために ～地域文化からの学び～
吉田 丈人　総合地球環境学研究所 准教授／東京大学大学院総合文化研究科 准教授

講演3 歴史景観の連続性と地域のレジリエンス
羽生 淳子　カリフォルニア大学バークレー校人類学科 教授、日本研究センター センター長

パネルディスカッション 地球環境と人類の未来可能性を探る
司会：阿部 健一　総合地球環境学研究所 教授

門司 和彦

吉田 丈人

羽生 淳子

松山 大耕
妙心寺退蔵院 副住職

元村 有希子
毎日新聞 論説委員

山極 壽一
総合地球環境学研究所
第四代所長
※2021年4月1日着任

主催：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

総合地球環境学研究所創立20周年記念シンポジウム 第2部 人新世を生きる私たちと地球の未来可能性

総合司会：岡田 小枝子　総合地球環境学研究所 准教授

ベトナム少数民族地区でのマラリア血液検査

講演1

生態学的健康観から考えるプラネタリーヘルス

生物個体は、それぞれが属する生物種のプログラムに従って環境に対応し、危険を回避し、栄養を得て、次世代を残してライフサイクルを全うしようとします。それが「健康」の原点です。人類は進化の過程において死を理解し、生を意識し、健康を追求するようになり、宗教はその理解を強化しました。従来、健康とは生物個体と身近な環境は一体であるという「生態学的健康観」という考え方が基本でしたが、近代になって、健康を環境と切り離し、疾病と対比させた「医学的健康観」が優勢になりました。地球環境問題の健康影響とその解決を考える「プラネタリーヘルス（地球と人間の健康）」は、地球規模の生態学的健康観であり、従来の生態モデルとも医学モデルとも異なる、新しいアプローチが必要であるとする健康観です。地域ごとの生態学的・環境学的課題を、地球規模の課題と関連させながら解決を考える地球研のプロジェクトの成果に今後も期待します。

門司 和彦　長崎大学多文化社会学部 学部長／熱帯医学・グローバルヘルス研究科 教授、グローバルヘルス専攻 専攻長
地球研2012年度終了プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクトリーダー

福井県に残る治水技術「霞堤」は、洪水を防ぎつつ、生態系ネットワークを守る機能もあわせもつ

講演2

自然災害に強くしなやかな社会を築くために ～地域文化からの学び～

近年、毎年のように浸水災害や土砂災害などの自然災害が起きています。経済発展とともに防災インフラが整備され、それまで経験したような自然災害は起きにくくなっています。しかし、気候変動が進むにつれ、自然災害は今後も増えると懸念されています。自然災害は、なぜ起きるのでしょうか。私たちは、自然災害にどのように付き合っていったら良いのでしょうか。それに答える一つのヒントは、先人達による自然災害への対応や、自然の恵みと災いの関係にあります。現在使われている技術が発展するより前から、それぞれの地域で自然災害への対応がなされてきました。自然の災いを避けつつ、自然の恵みをうまく活かして、地域の暮らしが営まれてきました。そこには、さまざまな知恵や工夫といった地域文化が見られ、現代の私たちに通ずるものが多くあります。自然災害はいつの日か自分の身にも降りかかります。その時どうするかだけでなく、それにどう備えられるか。自然災害に強くしなやかな社会を築くためにできることを、皆さんと一緒に考えます。

吉田 丈人　総合地球環境学研究所 准教授／東京大学大学院総合文化研究科 准教授
地球研2022年度終了予定プロジェクト「人口減少時代における気候変動適応としての生態系を活用した防災減災（Eco-DRR）の評価と社会実装」プロジェクトリーダー

青森県における縄文遺跡の発掘

講演3

歴史景観の連続性と地域のレジリエンス

日本列島は、その三分の二が森林でおおわれています。日本の農村では、近年まで、農作物だけでなく、木の実や山菜、きのこ、動物など森林から得られる多様な食料資源が人々の暮らしの中で重要な役割を果たしてきました。これらの「山の幸」の利用は、単なる自然の恵みではなく、焼畑・野焼きを含む里山の人為的な管理によって、はじめて可能なものでした。また、主食となるでんぷん質食料も、コメだけでなくヒエ、アワ、ムギを含む雑穀類、イモ類、さらには不作の年に備えたドングリやトチの利用も含めて多様性に富んでいました。食の多様性は、地域の食料システムのレジリエンス（弾力性・災害時の復元力）と直結しています。山の幸の重要性と多様なでんぷん質食料の利用の歴史は古く、その伝統の一部は縄文時代まで遡ります。この発表では、景観利用の歴史的連続性とその変化に焦点を当てながら、食料システムの長期的持続可能性と地域のレジリエンスについて考えてみたいと思います。

羽生 淳子　カリフォルニア大学バークレー校人類学科 教授、日本研究センター センター長
地球研2016年度終了プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ」プロジェクトリーダー

パネルディスカッション

地球環境と人類の未来可能性を探る

司会：阿部 健一　総合地球環境学研究所 教授

登壇者：門司 和彦　吉田 丈人　羽生 淳子
松山 大耕　元村 有希子　山極 壽一　総合地球環境学研究所 第四代所長 ※2021年4月1日着任

松山 大耕　妙心寺退蔵院 副住職

1978年京都市生まれ。2003年東京大学大学院農学生命科学研究科修了。埼玉県新座市・平林寺にて3年半の修行生活を送った後、2007年より退蔵院副住職。2016年『日経ビジネス』誌の「次代を創る100人」に選出され、同年より「日米リーダーシッププログラム」フェローに就任。2018年より米・スタンフォード大客員講師。2019年文化庁長官表彰（文化庁）、重光賞（ボストン日本協会）受賞。

元村 有希子　毎日新聞 論説委員

北九州市生まれ。1989年毎日新聞入社。2001年、東京本社科学環境部。日本の科学技術と社会との関係をつづった連載『理系白書』により2006年の第1回科学ジャーナリスト大賞を受賞。科学環境部デスク、同部長などを経て2019年6月から論説委員。近著に『カガク力を強くする！』（岩波ジュニア新書）、『科学のミカタ』（毎日新聞出版）など。東北大、富山大、九州女子大客員教授。

シンポジウム詳細はコチラ

https://www.chikyu.ac.jp/rihn/20th/